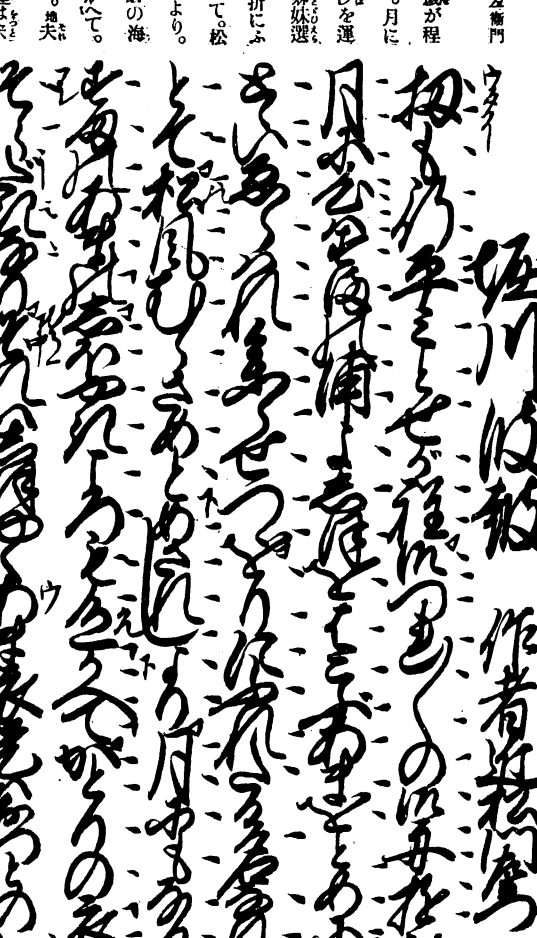
堀川波鼓

作者　近松門左衛門

ウタと扨も行平三歳が程。御徒然の御舟遊。月に心は須磨の浦夜汐を運ぶ海士少女に。姉妹選ばれ夢らせつつ。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されしより。月にも剛るゝ須磨の海士の。鹽焼衣色かへて。縁の衣の空炷なり。地夫は鹽焼く海士衣是は夫の江戸詰の。留守の仕事の張物や妹のお藤は

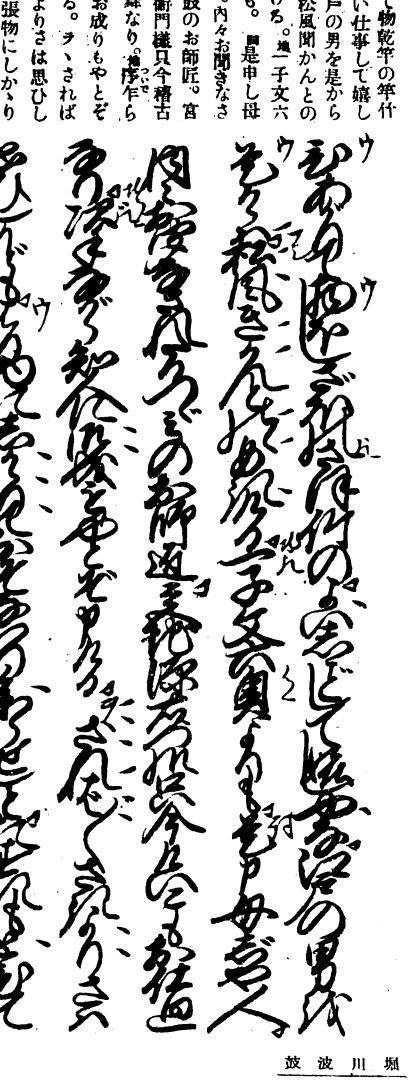


折よくも。幸の里歸りサァ手傳ひとゆふ襷。綴つけ絞る姉妹の袖雫だる風俗は國に名取の濱著とラシ閉えしもさる事ぞかし。嘯いやなうお鷹。詞必ずお主の氣に入つていつ迄も奉公しや。嘯男やなんど持ちやんなや身に抓みてこそ知られたれ。彦九郎殿とは嫁子ある夫婦故。嫁入の時の嬉しさは譬へん方もなかりしが。詞小身人の悲しさは隔年のお江戸詰。お國に居ては毎日のお城詰。月に十日の宿直番夫婦らしうしつぽりと。いつ

語らひし夜半もなしされども主は侍氣地斯う勧めねば侍の立身がならぬとて。心強うは言ひながら去年六月の江戸立に。又來年の五月にお供して。下る迄は逢はれぬぞや無事で居よ能う留守せよとの顔付が。目にちろ〳〵と見るやうでほんに忘るゝ隙もない。平常癖して居るやうでいつか〳〵と松の木に。衣張結び細引のつしゆうて思ひや晴らすらん。妹のお藤打笑ひ。姉様それは榮耀ちや。妾がやうに根から男の無い身でさへ。見事堪忍しまするぞや。殊にお屋敷行儀つよく。此のやうな親里でも一夜泊も法度なり。

姉様なら死なしやんせう人が聞いたら笑ひましよ。アレ奥に鼓の稽古がある高い聲さうしやるな。しるし〳〵を張物にオクリかいまみへのぞく。フシ鼓の手に。地心も乗りて連合を。うはの空なる戀衣松に打懸け干す内に。曲も終りのかけ聲ヤアウタと形見こそ今は仇なれ是なくは。忘るゝ隙もありなんと。詠みしも理や貉思ひこそは深けれ。地あら鎌しやあれ連合のお歸りぞや。いで〳〵迎ひに參らうと走り寄ればこれ姉様。間エ、正體ないあれは庭の松の木よ。彦九郎様は江戸にぢやわいの。地氣が違うたかと恥しむれば。エ、愚かなお藤

なんの氣が違はうぞ。男の留守の徒然のせめての心慰みよ。爰は所も因幡の國。まつとし聞かば歸り來んと。謠ひつ鼓のフシ頼もしさ。遥あら頼もしの。ウタと御歌や立別れ。いなばの山の峰に生ふる。松とし聞かば。今歸りこん。それは因幡の遠山松。是は懐し君こゝに。須磨の浦曲の松の行平。立歸りこば我も木蔭に。いざ立寄りて。磯馴松のなつかしや。フシ松に吹き來る。地風も狂じて天の留守居の淋しき折から。鼓に心を慰むなり。東戻りも早近々の。フシ風の便の。風もすゞしの組袴。フシ洗ひて春の長閑なる。舞影に程なく



干上りて物乾竿の竿竹の。よい仕事して嬉しやな。江戸の男を是からは。ヲ松風聞かんとのゝめきける。地一子文六奥よりも。聞是申し母ぢや人。内々お聞きなされたる鼓のお師匠。宮地源右衛門様只今稽古もお仕舞なり。地序乍ら知人にお成りもやとぞ申しける。ヲゝされば〳〵先よりさは思ひしかども。張物にしかりて遅なはり参らせしと。襟もといて身繕ひ座敷にぞ出でこけれ。地源右衛門膝を直し。聞我等は京都堀川下立賣に住居の者。御家中の方々へ鼓の指南仕り。行く〳〵は御奉公の望も叶ふべき様子により。折々御當地へ罷下り。

一年半年五ヶ月三ヶ月逗留仕り候へども。地未だお連合彦九郎殿には御近付にも成り申さず。此の頃御子息文六殿鼓御所望につき。師弟の契約致せしが中々御器用千萬さぞお袋の御満足。推量致し候と殷懃にこそ申しけれ。地女房會釋し莞爾と笑ひ。母と仰せ候へば彦九郎も私も年寄に聞え候が。もと此の者は我等が實の弟を。連合養子に致されまし僅か御扶持の小身者。先づ只今は御家中の。さる方へ預け置き候が。地何とぞ御師匠様の御世話にて。鼓の一番も打習はせ。御直の御奉公に出し度きとの念願にて。連合留守の内

なれども祖父御がお頼み申されたり。此の五月には連合も御供にて歸られん。其の時分は一番も打つて父御に聞かする樣に。一入頼み上げますと挨拶差配しと〳〵と。物柔かでさつとして。姿なら面體なら京の誰方の奥樣にも。誰が否とは因幡山フシ國育ちとは思はれず。堀妹お嬢も立出でて。私は藤と申して是なる者の妹にて。御家中に奉公勤め暮らすが。過文六に御懇お嬉しう。そおはしませ。姉の連合彦九郎殿留守の事なり小身なり。間所とても無きまゝ洗濯よろづに至る迄。斯樣に親の所にて致す譯にて候へば。過文六鼓の稽古迄此の所にては何事も。

御不自由に候はん彦九郎殿が戻られては。地内へも申し入れられましよそれお盃でも持て來いやい。父様はお留守か一人女子が這出なりや。興お客が一人あつてもア、不都合な事ばかりアノ、ほんに忌へさるる。地お恥かしやと會釈するフシ目許は姉に劣らじな。いや何もお構ひなさるゝなと。挨拶とりぐなる内に。下女は心得酒肴オクリ取揃へてぞ出しける。地女房お種は酒好にてヲヽ是は氣が付いた。浪人の親なればお肴は無くとも。お慰みに一つと言へば。御用もあらんに近頃是は忝し。先づそれよりいや其方よりお辭儀なし。然らば文六殿よりと言へども流石酒好み。手

まづ遊る盃の母がひに私から。お爛を見でと引受けてさらりとほし。地文六にぞ差しにける我等は育てたべぬとて。ちよつと飲んでお師匠へ慮外ながらと禮をなす。源右衛門蔵きて葉より上戸の家のもの。鼓舌鼓たんたんと打ちハッ〳〵。天晴御酒かな〳〵。拙者も深うは下されぬが些御酒を好む故。方々吟味致せども。是にはなか〳〵京酒も及びなし。地色よし香よし風味よし御亭主様の御心遣。御懐しう候と酒挨拶の答ぶりの。よきも過ぎては仇となるッ先の見えざるうたてさよ。直に是を文六殿へ返盞申すと言ひければ。鼓爰は

母が抑へまし間を致して上げませんと。又引受けてついとほし。酒がお氣に入つたらば。一つ上つて下さんせと盞かせもあへず盃取り。何が扨下されんとたんぶと請けて一息のみ文六にぞ戻しける。今度もちよつと召付て肴りながら叔母様へ。上げませうと差す所をはで扨如何に飲まぬとて。餘りすけない一つ飲みや。母が聞をしませうとたぶ〳〵受けてつつと干し。母の身で我が子のあひ目出度い上の目出たさに。江戸の父御の名代に愛は一つ重ねませう。サアおほあひを頼みますと ッシ又源右衛門にぞ差しにける。扨は御内儀にはちと御用

ひと見受けたり。駒々しき事ながらお手許見んと突戻す。妹は笑止がりいやく深うはたべられず。殊に此の頃あてられて氣色も勝れぬ折柄なれば。姉様もう置かしやんせと側からたつて止むるが。張合になる上戸の鏡エイ何いやる。お肴もない酒なれば飲んで上げるが。御馳走と。得手勝手より代へ銚子。客は手鼓一曲の。是では一つと差しめぐる。盃取つては天晴な。兵の交り。頼みある中のフシ酒宴かな。盃歡遍傾ける日も晩景に及びしかば。妹の主人の屋敷より中間來つて。「これ申しお藤女郎。迎ひに來ました」歸り

なされ。地御門が閉まると呼ばはれば。ヲヽ〳〵角蔵か太儀ぢやの。姉様さらば歸りませう。お客様へも不禮ながらまゝならぬ奉公人。又重ねてと辭儀を述べ〳〵暇乞して歸りけり。地文六もおとなしく私も旦那の屋敷。今宵は客もある筈なりお暇申し候はん。祖父忠太夫歸らる迄御師匠様は此の所に。今暫く御座なされ下されいとぞ申しける。源右衛門は兎も角もさり乍らお袋様と。さしで是には如何なり。あのお座敷へ參らんとフシ其の座を遠慮し立ちにけり。お種は文六送つて出で。是なう其方は内へちよつと立寄つて。祖父様にお歸りなされ

と申してたも。地我も亦戻り度いりんを迎ひにおこしてたも。心得ましたと打ち應へオクリ主人の〳〵屋敷へ歸りけるフシ門さし時の。町外れ。女主の年若き。夫は長の東の留守。心確かに持つ爲と。一つ過する酒好み。スエヲ亂れぬ顏もほか付きて。重たき頭撫揚やオクリ向ふ。鏡に餘情あり。フシ殿待ち顏の夕かな。地同じ家中の相役人。磯邊床右衛門は病氣とて。江戸供発され在國せしが。下人も連れず濱戸あけ。御見舞申すとつと入る お種はつと鏡をのけ。詞忠太夫は今朝程より。出られ留守にて候と言ひ捨てて入る

所を抱きとめてこれ申し。詞お留守を存じて参るからは御親父に用はなし。地そもじ様ゆゑこがれ舟人目の岩に波せきて。碎くる磯遊床右衛門今年お江戸を勤むれば。御加増あるは知れた事武士の立身振薬て。虚病を構へ願ひをあけ。御國に止まるも皆君ゆゑと思召せ。病氣も嘘で嘘ならず戀が病のお種様。假の情のお藥をちよつと一服頼みます。拜みますとぞ抱きしむる女房ちと酒には酔ふ。エ、いやらしや面倒やと振放して退きけれども。身の毛も立つて恐ろしくわぢ〳〵慄うて居たりしが。詞こりや侍畜生め。彦九郎とは懇なり。大間の道に背くといひ

御家中の後指。殿様のお耳に立てば身體の破滅となるが知らぬかや。地小倉彦九郎が女房ぞ侍の妻なるぞ。推參な事をして必ず我を恨みやるな。沙汰はせまいサア歸りやと苦々しくも言ひければ。詞いやいやや〳〵人の誹も身の恥辱も。思うて了うて上の事。地よし御承引なきからは此方と爰で刺違へ。上方に流行る心中と國中に沙汰をさせ。共に恥を曝さんと覺悟を極め來りしと。刀を拔いて胸ぐら取りどうぞどうぞと威しける。女心の誠と思ひ犬死といひ無き名を取るも口惜しし。たらさばやと分別して。詞ムヽ是は眞實か。ヲヽ殿様の御勘當受け。夫に首討たるゝ法もあれ偽りはな

いといふ。地扨も嬉しき御心底何しに無下に致すべき。されども爰は親の家今戻られては如何なり。明日の夜にても我等が内へそつと忍んで下されなば。打解け思ひを晴さうとフンしと〻打つてぞたらしける。地無智無學の床右衛門。二言に騙されほろりとなり。忝い御情此の上はあごながらとてもの事に今爰で。ちよつと〳〵と縄りしを開分けなやと逃げ廻る。樓の彼方に源右衛門。鼓を打つて聲をあげ。ウタヒ邪淫の悪鬼は身を責めて〳〵。劍の山の上に戀しき人は見えたり。嬉しやとて攀登れば。劍は身をとほす磐石は骨を碎くフシこぼそも如何に恐ろしや。地なう恐ろしや〳〵人が

來たそりやゝと。成されて床右衛門今のは何も皆じやれぢや。嘘ぢやゝと言ひ捨ててフシ走つて表へ逃げてけり。地無慚やお種は氣もすわらず。恥かしや京の客今の概略聞き給ひ。驅して言ふとはそも知らずエエ心の毫みばかりかは。地家中一ばいする人の世間の沙汰を如何せん。胸のだくつき堪へ兼ねて。下女呼び起し酒の燗表も閉めてもう寢よと。獨り酒酌み憂さ辛さ忘るる内も忘れぬは。江戸の夫の事ばかりフシ涙に。いとゞ朧夜の。地月さす椽に人音す。問ヤア是は源右衛門樣。お前はどれへお越しといへば。イヤ女中ばかりは遠慮に存じ。地罷り歸ると立出づる袖を控へて。扨はお前は

今の事お耳に入つたるかや。勿体なや慾ろしや彦九郎といふ男を持ち。眞實にいふべきやうはなし當座の難を遁れんため。騙して申した分の事御沙汰なされて下されな。偏に頼み參らすと手を合せて泣きければ。源右衛門も段方なく。いや聞いたでもなく。聞かぬでもなく。餘り側から聞き惡く餘をうたひ紛したり。申しても安大事抽者は他言致すまいが。錐は袋と外よりの。取沙汰は存ぜぬと振切り出づるを縋りとめ。さりとは怪しい御詞御身樣も若い殿。我も若い女の身實のかうした事聞いても。隱し隱すは世の情此分で往なせては。私心落付かず

言ふまいとある堅めの盃。取交して、と銚子を取り。濃茶茶碗にちやうとつぎ。つとほして又引受け。半分飲んで差しければ。こは珍しいつけざしと押戴いて飲んだりけり。お種も餘程醉は來る男の手を確と執り。詞これこな樣とても主ある者のつけざしを。參るからは罪は同罪。地何事も沙汰する事はなるまいぞと詰めければ。詞いやはやかゝる迷惑と飛んで出づるを抱き付き。エ、餘り戀知らず。地扨も辛氣な男やと兩手を廻して男の帶。ほどけば解くる人心酒と色とに氣も亂れ。互に息はず誠の戀となり。地サア此の上は今の事沙汰はならぬが合點か。ヲヽ〳〵餘所

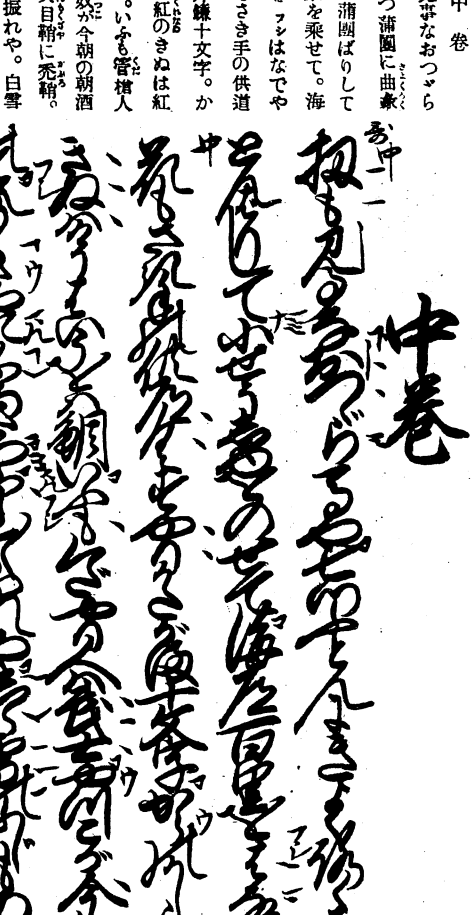
かと思へば我が身の上此の事を隱さいで何と障子を押開けて。轉寢枕假初の。緣のはし又因果のはしうたてかりける〳〵契りなり。フシ稍更け渡る。地時しもあれ父の成山忠太夫。下人も連れず立歸り門の戸荒く敲いたり。お種はつと耳に入り酒の醉醒め目も覺めて。我が身を見れば帶紐解き男と添ひし亂れ床。南無三寶あさましや床右衛門めが不義の沙汰。世間の口留せん爲にわざと戯れしかけし迄。慥にそれは覺えしが其の後は酒に醉ひ。夢現とも辨へず酒を止れと常々に。妹が意見を聞入れず我が夫ならで二生に。覺えぬ男の肌觸れて身を

機したかあさましや。女の罪の第一にて未來は愚か此の世の恥。親兄弟迄名を捨つる身を如何にせん悲しやな。夢になつてもくれはかしとフシ咽び。あけてぞ泣き居たる。歎きの音に源右衛門目を覺し起上り。是も同じく醉まぎれ。男たる身の道を背く。はつとばかりに目を見合せ互に恥かしくと。おもはゆけにも涙ぐみ。フシ差俯向いてぞ居たりける。忠太夫は待兼ねて猶荒けなく門敲く。あれ父様に見られては死なねばならず如何せんと。此處彼處に這ひ隱れ下女が臥したる夜着の内。狼狽へ入れば飛上り。丸裸にてなう悲しや。俺が寢た懐へ盜人が這入つ

て。雪の肌を荒すわと。地喚き廻る勢に行燈を踏みこかし。繼路の闇のくらがりと。唄ふは、物か是も亦マシよしなき事の迷ひなり。地表は頻りに聲を立て開けよくゝと敲くにぞ。お種も男も慄ひ嗤き後手に袖を引き。我が身で男を押隠し鍵あけて。閑父様かサア御入りと言ひければ。地親にてはなかりけり床右衛門顔かくし。手を差伸べ兩人が袂を一つにしかと取り。閑サア不義者證據を取つたるぞ。地聲をかくれば南無三寶と潛戸はたとさしけれども。取つたる袂放さばこそ詮方なくも源右衛門。腰の脇指するりと抜き二人の袂切放し。戸を引明けて一散にッ我が家を指してぞ。

逃去りける。地床右衛門は袖下を懐中に捻込んで。戸をこじあけて内に入り。詞さりとはお内儀曲が無い。人には免す下紐の我にはなぜつれないぞ。地此の事隠してくれならば今宵のお情頼みますと。闇がりに手を擴げッシ尋ね廻るぞ恐ろしき。地立まふ内に裸身の下女にはつたと行當り。こりやこそ雲にと抱きあふ下女は勝手は覺えたり。我が寝所へと逃げ行けばこは忝し有難いと。夜着引被きかつぱと臥す下女はいやがり捻合ふ間に。お種樣のお迎ひにりんが只今參りましたと。提燈ともし來りける火影にすかし床右衛門。よく〳〵見れば下女子エ、勿體なやいま〳〵し。鍋で精進落ちようとしたと。跡見返らず逃げて行く闇の。現ぞ三重やうつくしや。

歌扨も見事なおつゞら馬や。七つ蒲團に曲象する。て。蒲團ばりしてナ小姓衆を乗せて。海道百里をフシはなでやる。花もさき手の供道具素槍片鎌十文字。からの頭の紅のきぬは紅梅魚は鯛。いふも管槍人は武士。奴が今朝の朝酒の。フシ天目箱に禿箱。振れ〳〵振れや。白雪の富士も淺間も跡に見る。道も長柄の數槍のさやにかゝりし木綿づけ鳥。關より西に離れなき。名を望月の引馬やヽ。ヽ鞦の音のしやん。〳〵



りん〳〵しやりりん〳〵と。心拍子に乗掛は六番頭使番。侍大將奏者番旗大將の跡先に。續きて靡く旗棹の世時治まり 地四方の海。波靜かにて天つ空風も殘刀見えたるは。醫者よ儒者よと フシ物識も。地知らぬもなべて行列に。舌をまく串挟箱引きもちぎらぬ持弓の。滋籐塗こめ其の數は。いさや白木に フシ側黒の。弓に靫に矢籠矢箱。二重の覆着長の。其の具足櫃甲立。たちて程なき東路も一歳越えし國の留守。七つ何事七つ道具の臺笠。立傘。馬印。これぞと名にし大鳥毛。御召

の駒も乘替も己が故郷の北風に。勇んで嘶ふ勢ひや跡に抑への對道具。國久しかろ目出たかろさこそ。嬉し家老殿君たれば臣も亦。しん檜の酒さゝんざや濱松の葉の地散り失せず。萬代經べき國入の國こそ久し三重かりけらし。フシ家中の上下。

地親妻子に一年ぶりの對面に。彼方此方の悅び使祝儀土產のとりやり持。中間小者に至る迄フシざゝめき渡るぞ賑はしき。地中にも小倉彦九郎。數年の勤め蔕功によつて。東發足の刻拔群の御加增賜り。若黨下人いや增して一子文六お種兄弟オクリ悅びへあふ事限りなし。地爰に主の妹聟政山三五平といふ。

馬廻。是も此の度歸國ありしがお種の方へ使を立て。圖先づ以て道中何事なく御供にて。久々にて御對面さぞ御滿足候はん。此の方とても同然たり。扨何がな土産と志し候へども。さして變りし品もなし。是は關東麻とて名物の眞苧。如何しくは候へども御留守の間お種樣。眞苧を御うみなさるゝと道中すがら家中の沙汰。罷り歸り承れば御當地にても其の沙汰ゆゑ。地進上致し候と言ひもあへぬに彼方の是は誰樣より。此方の是は何兵衛樣お種樣へのお土産とて。贈るにつけても女房は心にこたへ取沙汰の。夫の心も付くやとて。顏を見れども夫はさせる氣もつかず。圖それ此方も荷を解

きて。相應に土産物見合せて贈るべし。ヤア忘れたり先づ舅殿へ參らうぞ。地それ〳〵袴あいと言うて女房は フシやがて奥にぞ入りにける。地摺違うて妹のお藤する〳〵と走り出で。図袖に取付きこれ彦九郎様エ、お前は曲もない。お江戸迄二度進じた文の返事はなぜなされぬ。地私心はなほ此の文に具の事。分別極め書きましたれば否でも應でも合點して。貴はねばなりませぬと。封ぜし一通姉聖の フシ懐に押入る。図彦九郎苦い顔して。ヤア其方は狂氣めさつたか。尤姉をよぶ時分そなたの談合もあつたれども。縁なければ姉とこそ夫婦と定まりて。十何年といふ年月を

重ね。子迄養ひ置きたる仲を如何程に思はれうが。去つて其方に添はんとは此の彦九郎はえ申さぬ。堆斯様な文は手にも取らぬと ツシ 投付け表に出でにける。姉のお種奥より見て。つか〳〵と出で文を拾うて懐中す。いやその文は大事の文人には見せぬと取付くを。はたと蹴倒し棕櫚箒おつ取つて散々に打伏するあれよ〳〵といふ聲に。文六下女ども駈付けて何事か存ぜねども。御堪忍と縋り付き箒をたくれば。荷物につけし鼻 綱引抜き。顔も頭も割れでのけと縋け打にぞ打つたりける。お藤は聲あげなう痛や死ぬるはなう。助けてたべと泣き叫

ぶ文六鼻捻に取付き。圖これ母様如何やうの事か存ぜねども。言葉にてお叱りもあるべきに。荒けなき打擲叔母様目でも眩うたらば。何と言譯なされんと苦々しく言ひければ。塊いや打殺しても大事ない姉の夫に執心かけ。江戸迄文を遣つたるをたつた今慥に聞く。今も拾うた是見よと封じめ引切りさつとあけ。圖是が嘘かある事か姉を去つて暇を遣り。私が夫婦になろと生爪はなして入れたる文。塊是が嘘か讃んで見よぇゝ悟や腹立と。飛びかゝり髪を取つてくる〳〵と。手にからまいて膝に敷き。親にも子にも代へじと思ふ幼馴染の我が夫。一年隔

てし長の留守月よ星よと待受けて。やう〳〵と今朝殿御の顔。見たぞ嬉しや來年迄は一つに寢臥もせうものと。悅ぶやさきに已れめは姉を去れの離別のとは。ようもいうた畜生面。生けて置くも腹立やと目鼻もわかず打撲く。なう是には言譯段々あり。取支へてたべ人々なうスエテ息も絶ゆると叫ぶにぞ。地先づ言譯をお聞きとたつて支ゆれば姉お種。サアさあ言譯が立たぬからは此の度は命を取る。言譯あらばして見よと。取つて引立て突退けしは フシことわり道理至極なり。地妹苦しき息をつき。亂れ髪を撫さ撫で〳〵涙を押へ。同此の言譯は

姉様と差向ひに言ふ事ぞ。地皆々次へと言ひければ。ワシ何れも立つてぞ退きにける。詞ヤア仔細らしうせずとも言譯を聞かんといへば。妹涙をはら〳〵と流し。これ姉様自らが彦九郎様へ狀を付け。姉様を去つて下されと言うてやつたは姉孝行。此方の命がワシ助けたさよ。言ふに及ばす覺えがあらう。鼓の師匠源右衛門と念頃してござらぬかと。言ふ所を飛びかかり口を押へこれ默りや。詞假初ながら安大事何を見て地さはいふぞ證據を出せと言ひければ。ヲヽ證據迄もない事よ。此のお腹には四月になる兒は誰が兒にて候ぞ。下女のりんに質はせられし墮胎藥は誰が飲むぞ。人は知らぬやうなれど家中一ばい

是沙汰で。今も今とて方々から眞芋の土産に來りしも。彦九郎樣に知らせの爲最屁の方から氣を付けに。來た物なりと私は見た。此方一人で親兄弟。男の武士迄廢つたとスエテ聲を上げて泣きければ。埴姉はとかうの詞もなく。常の意見を聞かざりし。酒が敵とばかりにてフシ泣くより。外の事ぞなき。埴妹せき來る涙を抑へ。なうその悔みがもう半年遲かつた。これ妹が心の物思ひ。最早姉の名は廢るせめて命が助けたやと。とりく樣々思案して彦九郎樣との緣切れて。暇の狀さへ遣らせなば街道の眞中で產ませても大事ない。命に障りは無い筈と果敢ない女子の思案から。

姉の男に執心と淫奔者に身をなしたも。姉様ばかりの孝行ならずお果てなされた母様へ。孝行と思ふ故ぞとよおいとしや母様の。御臨終の二日前二人を枕の右左。遺言のお詞をスエテよもや忘れはなされまい。地そちら二人は小さいから女子の道を教へ込み。讀書縫針絲綿の。道もそれでは[illegible]耻かゝず。第一女子の嗜は殿御持つてが大事ぞや。舅は親ぞ小舅は兄よ姉よと孝をなせ。外の男と差向ひ顔をも上げて見ぬものぞや。同總じて夫の留守の中男とあらば召使。一門他人押並べて年寄若いの隔てなく。地此の

嗜みが悪ければ。四書五經を宙で讀む。女子でも役に フシ立たぬぞや。地此の遺言を其方たちが。論語と思ふて忘るるなとの。御詞が骨にしみ肝に殘つて得忘れぬ。圖姉は父御の孫を繼ぎ後紐から酒を飲む。藤よ母に成り代り意見をせよと 地 其の跡は。はや息切れの聲れ顔身に付添うて忘られず。朝夕位牌に向へども此の遺言をお經と思ひ。一遍づつは繰つて見る姉樣は早忘れてか。此の世の妹に歎きをかけ來世にござる母樣の。屍に苦患がかゝるはと。口說きつ恨みつ聲を上げ フシ伏し沈。みてぞ泣き居たる。地姉は詞も涙に咽び。好みし酒も今思へば前世の業の毒

の酒。無明の酒の酔さめて自害せんと思ひしが夫の顔を今一度見度い〳〵と思ふより。今日ど延び明日と暮れ世間に恥を曝すこと。我が身に悪魔の魅入かと歸らぬ愚痴の繰言に。姉妹縋り抱き合ひ ワシ 聲も。惜まず泣き居たり世に是非。もなく寡なり。地時に門外騒がしく口論あるか先づ暫しと。姉妹奥に入りければ彦九郎妹のゆらは。長刀を取りのべて兄彦九郎を追かけ來り。詞これ兄様。妹とは言ひながら改山三五平といふ待の妻なれば。義の立たぬ事あれば兄とても発されず。如何に〳〵と申しける彦九郎はつたと睨み。ヤアこざかしき女郎めが。兄彦九郎に向つて義の立たぬとは推参

千萬。仔細をぬかせぬかさずば長刀持つたる腕ぼし共に。捻折つてくれんずと大きに怒つて言ひければ。ゆらゆら〳〵と笑ひ。ヤアしほらしい腰拔殿。樣子を言うて聞かせ申さん。此方の内儀は鼓の師匠。京の宮地源右衛門と密通して。御家中此の沙汰眞最中。それ故土產に眞芋を遣し氣を付けても。女敵をも得討たず聞かぬ顏する腰拔の彦九郎。其の妹とは濟ひ難しと。夫の政山三五平我に暇をくれられて。兄が腰立つたらば其の時は立歸れ。元の如く夫婦にならんと離別して來つたり。これ腰拔の兄御。我が夫に添はせうか添はせぬか。其方の一心一つぞと。長刀取伸べ閃かしフッたるまば斬らんす

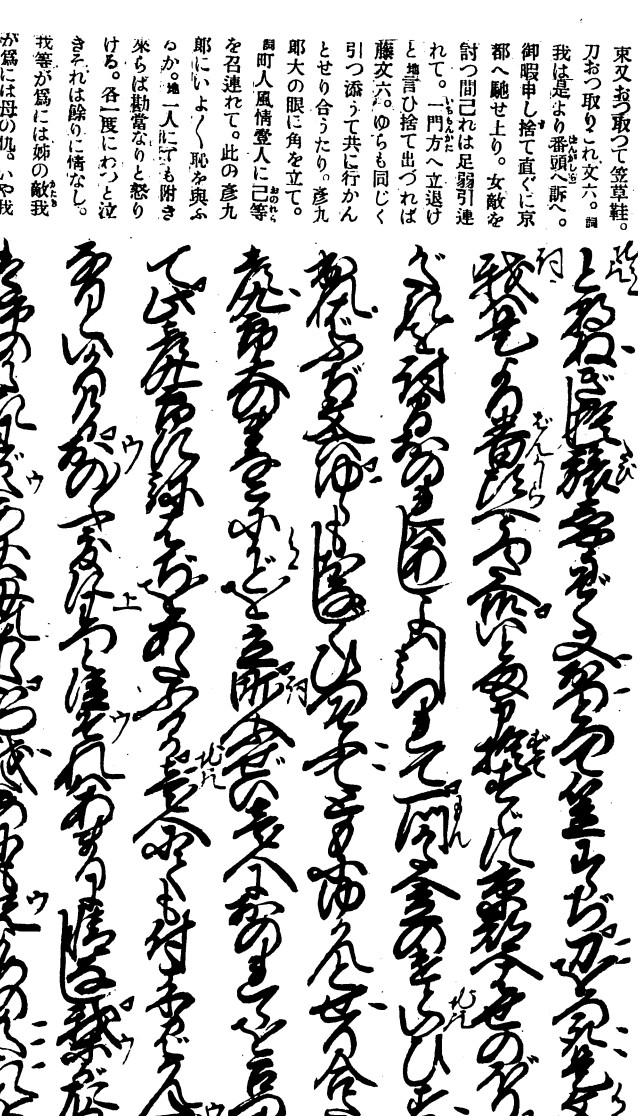
勢なり。彦九郎横手を打つて。ムヽ是は珍事を聞くものかな。其の源右衛門とやらん音には聞けど面は見ず。遂に家内へ出入せず證據やあると言ひければ。ヲヽ三五平程の者が證據を取らいで言ふべきか。則ち傍輩磯邊床右衛門。氣色を見て取り身廻にもてなし。兩人忍び逢ひたる夜の兩袖切つて取つたるが。御家中取沙汰ある上は隠しても隠されず。如何に傍輩の懇とて直には此の事知らされずと。夫の三五平殿に柱進ある。地これ御覽と懐中より二人の袂を投出し。是にも何と疑ひかと色を違へて申しける。彦九郎取上げ見て男の袖は知らねども。女の衣裳に覺えありこりや妹。たつた

今其の方が恥辱を雪いで得させんず。此方へ來れと打連れてオタリ座敷にへこそは通りけれフシ家内の上下。地是を聞き鳴をひつそと鎖めし時。詞主少しも騒がず女房ども來れ。倅文六來れと地詞少なに呼びければ。何れもすはや大事ぞと。そろ〳〵夫の前に出で頭を下げて居たりしは。身も冷え渡り魂きえフシ息を閉ぢたる其の中に。地無慚や種は心にも巧まぬ不慮の悪縁の。身の錆刀夫の手で及にかゝるは覺悟の前。やがて逢はんと長の留守辛抱盞せしかひもなく。去年發足の前の夜の枕が限りの枕とは。今殺さる〻今迄も思はざりしと

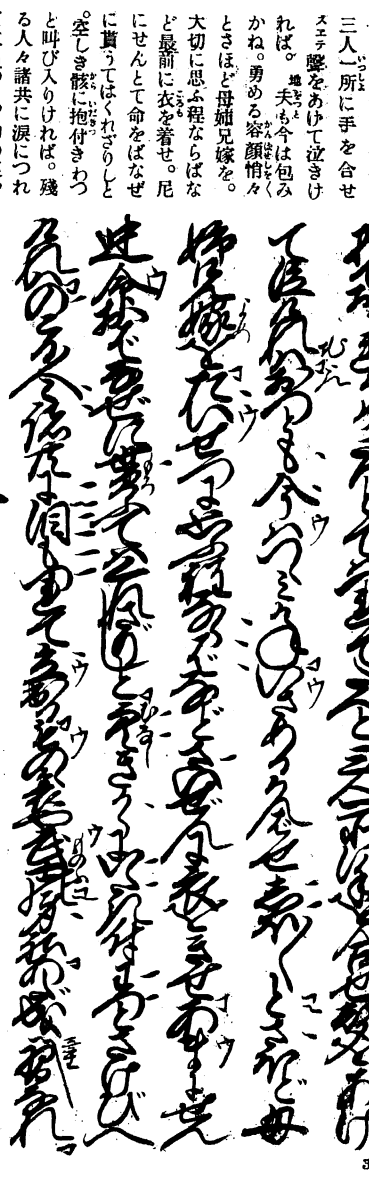
慰ぶにも。今一度夫の顔見たやとは思へども。涙にくれて目もあかず。ラシさしうつ。むいてぞ泣き居たる。詞主人兩袖投出し。妹ゆらが言ひ分定めて何れも聞きつらん。女言譯ないかいやい。ムヽさこそ〳〵返答はあるまじき。扨不義は媒同罪たり。麁は媒知らぬかといへば。ア、愚かなり彦九郎樣。地媒を知る程ならば。斯樣に恥を見るべきかとスェチまたさめ〴〵とぞ泣きゐたる。詞扨は下女めが媒ならん。そいつ呼べと呼出せば。地がち〳〵〳〵身を顧はし。詞ア、御勿體なや私は何にも存じませぬ。詞此の間お種樣。人に隱して子おろし藥を。買うてくれとおしやりまして一貼を七分づつ。詞三貼を貳匁壹分で買うて參つたばつかり。さり

ながら旦那様のお聞きなされたら。高い物を買うたと叱られうかと思うて。地錢はしかけてやりましたと フシ何をいふやら譯もなし。彦九郎はつと驚き。詞扨は懐胎したるかやい文六。己れ若年なれども是程家中の沙汰といひ。何として源右衛門疾くに討つては捨ざるぞ。地いや我等も今朝承り。家來どもに申し付け彼が旅宿へ討手に遣し候へば。詞二三日以前に京都へ歸り候といへば。ム、是非に及ばずそれ持佛堂に火を燈せ。地女立つて持佛へ來れと言ひければ。女房涙押拭ひ。未來の末の後の世迄御恤しみのあるべきに。持佛堂へ參れとは流石なじみの御情。スエテいつの世にかは忘るべき。その御心を此の

年月知つていとしき我が夫を。袖にしての不義ではなし夢見たやうな身の上の。間に憎い奴もあれど言へば卑怯の未練の死。夫の刀の先するは如何とは存ずれども。是は我が身の言譯なり免して下され是御寛ぜと。胸押開けば九寸五分膳先に切羽迄。刺通してぞ居たりけるフシ哀れなりける覺悟なり。藤文六はあつとばかり涙は胸にせき來れど。悄れぬ主人の顏に愧ぢスエテ齒をくひしばり歎き居る。調彦九郎刀を拔き。とつて引寄せぐつと刺し。地返す刀に止めを刺し。死骸押遣り刀を拭ひ。しづ〳〵仕舞うて立つたりしフシ武士の仕方のすゝどさよ。



と言ひ捨て出ればと言ひ捨て出ればと言ひ捨て出ればと



繕てて置かれうか。然りとては連れてたべと三人一所に手を合せスエテ聲をあげて泣きければ。地夫も今は包みかね。勇める容顔悄々とさほど母姉兄嫁を。大切に思ふ程ならばなど最前に衣を着せ。尼にせんとて命をばなぜに貰うてはくれざりしと。空しき骸に抱付きわつと叫び入りければ。殘る人々諸共に涙につれて立出づる。物の哀や武士の身こそ。仇なる三重〳〵慣なれ。

下巻

フシ 寺御幸麩屋富。地柳堺町相の東は玉敷の。御垣にかこふ五つ緒の車。烏丸兩が室。衣新釜西小川。油さめが井堀川の岸の平沙を。

白波に。照せば今も夏の夜の。下立賣のほのぐ〜明け六月七日祇園會の。長刀鉾の切先にうちかち時の鶏鉾と。門出を祝ふ力紙。拳を固め四つ辻に ッ四人さまよひ立ち居たり。常さへ賑ふ上京の折しも今日の祭客。下へ〜と朝霧のひまに門掃き打つ水の。かゝる姿を咎むやと。西と東に行別れ立休らへる折柄に。豆腐商ふ商人のきらず〜と聲高に。賣る辻占の耳に立ち心後れとなりやせん。南無三寶と橋詰に各寄れば向より。白川石を商ひに賤の曝等が馬追ひ連れて。 同連を呼ぶさへ同じ名の。お藤や。今日は商はやしまうて。祭に行かうと

氣が急いて馬に沓さへうたなんだ。ヲヽされば同じ事。今朝は少し寢過して此方も沓をうたずに來た。誰も今日は皆打たれぬいつそ打たずに此の分で。とつとと引いて歸りやいの。とフシどつと笑うて通りける。京童の口荒家々毎に朝もよひ。萬に心もみ瓜を剝む音さへ比叡の山。峰に響くと傳へたる。都の今朝のあなかまとフシ心亂るゝばかりなり。中にも藤は小聲になり。いづれも何と思召す。最前の豆腐屋がきらずく〜と賣つたるさへ。心にかゝる其の上今の石賣噪ども。馬の沓が打たれぬ打たずに牽いて歸れとは如何にしても氣がかりなり。其の上世間に同じ名のあるは習ひと言ひながら。折しも

惡う一人をばお藤と呼んだは何事ぞ。味方の心後れては仕損ずるは定のもの。天道よりの御知らせ又明日の日もあるものを。今日は延引せまいかといへば皆ッ二の足にぞ成りにける。詞かゝる所へ西橋詰の髪結床より。さばき髪の若い者楊枝咬へて來りしが。友と思しく行違うたりヤア。是は早早から髪も結はずに何處へといふ。さればく祭に行く今日のはれ。月代剃らせに行つたれば。扨も切つたはく。あら剃刀の刄は劍。頭うちを切りちやくくつた。地彼が奴が手にかけては幾人でも切りさうな。是を見よといひければハテ。切つたりく。是で咎に行つたらば祇園祭ではなうて。軍神の血祭ぢやと笑ひて。そは

別れけれ。塙四人嬉しき辻占の今のを聞いたか聞きました。サア破軍が直つた仕濟したと。そゞろに笑うて勇みをなす心底思ひやられたり。いざ此の運に乘つて討たん時刻延ばすな用意せよと。帶締め直し身を輕め内の勝手を知らざれば。爰にて談合無益の沙汰女二人は堀川表。小見世に上つて障子蹴破りつつと入れ。我々親子は立賣の門口より中戸を蹴破り込入るべし。面體を見知らぬぞ人違へするな。神妙に意趣を述べ物の見事に討たんずる。早まつて騙し討卑怯なと言はするな。合點か合點ぢや心得たか心得た。サア込入らんとつつ立つ所へ。詞あれ見たか油の小路を此方へさし。蠟

燭鞘の槍印知行ならば三百石。廿除りの若侍茶宇の袴に縹肩衣。地若衆三人挟箱對の奴草履取。十枚糊の付紙奪足打早め敵の門。ものもうと言ふも訛り聲内より下人がどれいと應へ。濤ばたに蹲へば何かは聞えず稍暫し。頭を振廻つて口上述べて進上盞を差出せば。下人は請取り腰屈めフシ其の儘内に入りにける。地文六頭を掻いてエ、拍子に乗つた先を折る。如何はせんともがきしをいやいや屈する事勿れ。詞屋敷方か御所方か。囃子を勤めし禮物と見受けたり。返事を聞いて歸る分際は入るまじ地待つて見よと。いふ内に以前の下人立出で。是へと言へる氣色

にて主人内へ入りければ。若黨中間草履取槍を軒端に立懸けて。皆々内に入りけるは フシ 事緩やかに見えてけり。地外より様子を窺はんと立寄り見れども中戸を締め。人音ばかり聞えし所に托鉢の道心者。はつち〳〵と門に立つ。下女の聲して忙しい通りやときつなげにも高聲なり。悄々通る法師を呼びかけ。白これ〳〵御坊。御身が衣の破れまはつて見苦しさよ。此の金子を報謝する。新しいを買うてそれを是に脱いで行きや。地非人に取らせ悦ばせんと小判一兩與ふれば。夢かと思ふ顔つきにてアヽ是は如來樣と。頂き〳〵伏拜み。それなら御意に任せませうとフシ古者は脱いでぞ通り

ける。地彦九郎打振辻なる門の片隅にて。頭巾引込み阿彌陀笠。上に衣を引つ張つてオクリ暖簾の〳〵端より差覗き。地かねて覺えし普門品本望遂ぐる身の耐禍。案内慢見の便とも力を添へて只頼め。妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五稱時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩。以何因緣名觀世音菩薩。詞エヽ喧しい獣りや遣らうと走り出る。下女が手の内うらどうて。申し女郎樣。早々かあのお客さうな。誰方でござると問ひにける。地いづれ下部の口まねにあれは田舍の御侍。これの日那殿の鼓の弟子。

お國の殿様から鼓ゆゑに御加增があつたけな。是も師匠のお陰ぢやてて今度禮にござつたが。旦那様へ銀十枚内儀様へ壹歩五つ。俺等迄つらりつと三百宛あたゝまつた。わが身の一日朝から晩迄咽の穴の痛い程。觀音經を讀みやつたとて三百は貰やるまい。さらりと經を取置いて手鼓なりとも打つたがよい。今からでも鼓を打ちやと。間はず語りの口早に フシ言ひ捨て内に駈入りける。與彦九郎打頷き樣子は聞いたり今からでも。鼓を打てとは吉相ぶしと フシ皆々呀き勇みける。時を移さず客人は上下脱いで脇指ばかり。編笠被き只一人四邊を忍ぶ風情にて。立賣を

東へ洞院南へ下りける。人々一所にこぞり寄り是はきつと推量するに。詞只今の侍が下人どもを殘し置き。表に槍も置き乍ら其の身は是に居る體にて。地祇園會の山鉾を見に行くと覺えたり。七八人の下人ども止まつてあるからは。なか〳〵容易く討たれ難し。如何はせんととりく〳〵に小聲になつて談合す。詞文六怱へぬ若者の。斯樣に言うてはいつ迄も本望遂ぐる時節はあらじ。下郎どもあらばあれ目ざす敵は只一人。地助太刀あらば撫斬のそれからは運次第。いで斬入らんと斷出づるやれ待て思案出來たりと。押鎖めて彦ヵ郎また門に立ち暖簾あけ。詞是申し頼みまをさう。先程是より編

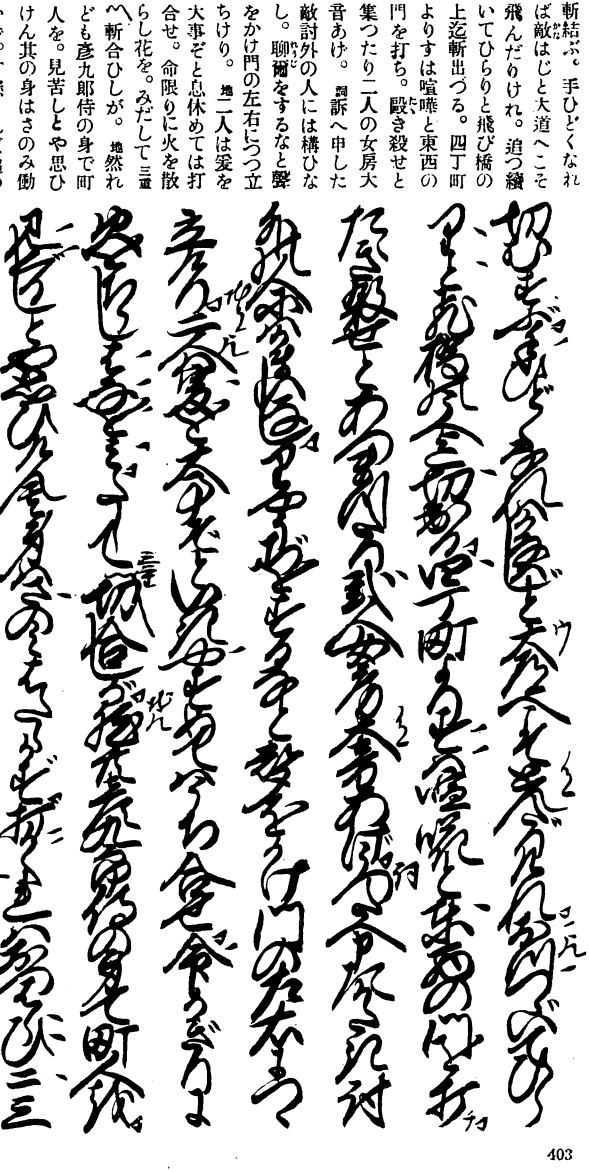
笠召してお出でなされた殿達は。山鉾見にがなお出でならん三條上る室町で。喧嘩し出して大勢に取巻かれてござります。お知らせ申すと呼ばはりける。是はしたりと下人どもはらく〜と駈出でて三條とはどう行くぞ。室町とは何方へ行く。北か西かと追取刀我劣らじとぞ走りける。此の方の謀略當らずといふ事なく。運の盛り刻限先勝の時到れりと。衣脱捨てふはと棄て親子の脇指両人の。女に渡せば心得て鐔打鳴らしほつ込んで。鉢巻凛々しく抱へ帯からげし膝口しろぐと。小足を踏んで立つたるは男勝りと謂つべし。南無正八幡大菩薩神力威力を添へ給へと。心中に祈念して

二人の女は堀川口。親子は立賣西東へ立別るると見えけるが。中戸障子を蹴破つてばらばらと駈入つたり。思ひがけなき家内には下女も下人もあゝ怖やと。裏口さして逃出づるあれこそ宮地源右衛門と。お藤に聲をかけられて安閑たる源右衛門。立上つて二階梯子半上つて腰打かけ。拳を握り左右を睨んで控へしに。隙間もあらせず二人の女兩方に引つ添うたり。彦九郎大音あげ。我こそ小倉彦九郎。妻女種と不義の段露顯によつて。女は先月廿七日に刺殺す。妻敵やらぬと聲をかけ拔打にはたと斬る。さしつたりと足をあげ梯子に

手をかけるいやつと。二階へ上るを追つすがい上らんとせし所を。源右衛門が女房かけたる長刀押取りのべ。上げは立てじと斬結ぶ下人どもは物間より。寄棒杖よ箒よと支ゆるも枷となり。ためらふ内に源右衛門蟲籠窓より手を出し。軒に立てたる槍おつ取り上り口より差下しに。上らば突かんといふまゝに眞下しにぞ突きかけたる。彦九郎あざ笑ひなんの己れが鼠突。皷の胴こそ握るとも槍の柄握り習ひは知らじ。身の奸いたる細工槍手並を見よと。蛭卷よりかつしと切つてぞ落しける。もの〳〵しやと腕の力碁盤片手に振上げて。こりや我は元より

武士ならず。槍持つ術は知らねども鼓のお蔭で打つ事覺えた。此の碁盤受けて見よと狙ひすましてはたと打ち。地雙六盤將棋盤取つては投げ〳〵。後には火入煙草盆風呂釜茶碗枕箱。ぐわらりと打あけ手にさはるな。はらり〳〵と投げたるは　ッシ只降る雨の如くにて。地寄るべきやうも無き所に妹のおゆら表へ廻り。辻の門に手をかけて柱を傳ひ門へ。庇より這ひあがつて拔打に丁ど斬る。源右衞門詮方なく四尺屏風を倒しかけ。上より取つて抑ゆれば跳ね返さんと拂ひ合ひ。終に脇指もぎ取つたり其の隙に彦九郎。梯子を上つて餘さじと追つたて〳〵

斬結ぶ。手ひどくなれば敵はじと大道へこそ飛んだりけれ。追つ續いてひらりと飛び橋の上迄斬出づる。四丁町よりすは喧嘩と東西の門を打ち。殿き殺せと集つたり二人の女房大音あげ。詞訴へ申した敵討外の人には構ひなし。聊爾をすると聲をかけ門の左右につつ立ちけり。地二人は髪を大事ぞと忌休めては打合せ。命限りに火を散らし花を。みだして三重へ斬合ひしが。地然れども彦九郎侍の身で町人を。見苦しとや思ひけん其の身はさのみ働かず。打懸くれば追つ拂ひ二三度揉ませて是迄と。射る矢の如くつつと入り弓手の肩先馬



手の下りに。ざんぶと斬つて落せば。ッシ犬居にどうとぞ伏したりける。地文六鑢で飛びかゝり母の敵と斬付くる。藤がためには姉の敵受取れと丁と討ち。同じくゆらは兄嫁の敵。恨みの刀とはたと斬る。四人一所に乗りかゝつて。一度に止めを刺いたるはッシ前代未聞の振舞なり。地壹町集まり棒つき並べ。敵討とは申しながら町内の念のため。腰の物を預つて有無の御下知ある迄は。外へは落し申されず會所へ取つて押込めよと。地ッ四人の男女打圍ひしんづゝと歩み行く。見事さ立派さ。心地よさ世上にばつと囃し立て。言ひ渡したる山鉾のちやんぎりしつきり斬つたりや。討つたり敵妻敵討咄の。通眞直に言へば言はる舌三寸の。操の御評。判とぞなりにける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜等不殘毫厘令加筆候可有開版者也　竹本筑後掾

重而予以著述之本令校合候畢全可為正本者欽

近松門左衛門

大坂心斎橋二丁目　堺屋　山本九兵衛

山本九右衛門版

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾

竹本博教（印）

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門信盛 押花

大阪高麗橋壹丁目
正本屋山本九兵衛版
山本九右衛門版